

■ 米インフレ期待は着実に強まり、ドル強気は継続

昨日（3日）の米10年債利回りは1.14%近辺まで再びの上昇。5年物のブレイクイーブンレートが8年ぶりの水準に上昇するなど、足下でインフレ期待がジワジワと高まってきていることに因る。それは、1日に発表された1月のISM製造業景況指数において素材などの仕入れ価格の上昇が示されていたことや、昨日発表された1月のISM非製造業景況指数がほぼ2年ぶりの高水準となったことなどによっても裏付けられる。

むろん、これらのソフトデータが追加の経済対策やワクチンの拡大に対する期待によって押し上げられていることは言を俟たない。前回更新分の本欄でも述べたように、今後の景気回復の行方は政策対応とワクチン拡大のスピードがモノを言うのである。

振り返れば、先週26日に公表されたIMFの世界経済見通しにおいても、米国の2021年の成長見通しは前回公表分から2.0%ポイント分も引き上げられていた。

英医療調査会社のエアフィニティーによれば、コロナ禍を克服して「社会が日常に戻る時期」は米国が今年4月、カナダが6月と主要国の中では最も早いと予測され、9月と予測される欧州や来年4月と予測される日本などとは歴然とした差違が認められるという。つまり、景気回復が本格的にスタートする時期が最も早いと考えられるのも米国で、次に欧州、日本の順に時期が遅くなる。もちろん、それに依じて金融政策当局の対応も異なってくるに違いない。

目下のところ、米当局と市場は2013年5月に生じた「テーパー・タントラム」、すなわち「バーナンキ・ショック」の再現を恐れるあまり、そう遠くない将来におけるテーパリング開始の可能性について「知らぬ、存ぜぬ」の体面を貫いているが、いずれ必ずテーパリングはスタートするし、投資家の意識下にも間違いなくそうした前提が据えられている。

つまり、少し長い目で今後、着実にドル買い材料は積み上がって行くわけであり、現在はそうした将来から少し溯ったところにあるのだ。

結果的に、足下のユーロ/ドルやドル/円のトレンドはテクニカルにドル高方向へと転じることとなった。ユーロ/ドルに至っては昨日、一時1.2004ドルまで下落し、前回更新分の本欄で想定した通り、一目均衡表の日足「雲」のなかに潜り込んだうえ、89日移動平均線（89日線）や1.20ドルの節目を試す動きを見せた。

なお、下図に見るようにユーロ/ドルの1月の月足終値は、その26カ月前の位置に描画される



その26カ月前の位置に描画される遅行線が月足「雲」上限に上値を押さえられる格好となった。過去においても、月足の遅行線と月足「雲」との位置関係が重要な鍵を握ったケースは少なくない。

当面は1.20ドル処や日足「雲」下限を下抜けるかどうかは焦点であり、慎重派にとっては暫し様子見となるだろうが、個人的に筆者は日足「雲」を下抜ける可能性が高いと考える。

一方、ドル/円の日足については既に一目均衡表の「三役好転」が示現し、ついに105円台に乗せる動きも見られている。ただ、足下では上げ一服の状態となっており、どうやらオプションや実需との絡みによって105円処でのみみ合いを余儀なくされている模様。

今週金曜に控える1月の米雇用統計の発表を通過すると動きが軽くなりやすいと見られ、さしあたっては200日移動平均線を試す可能性もあると見る。なお、同線を上抜けると次に昨年3月高値から直近安値までの下げに対する38.2%戻し=106.07円が上値の目安になりやすいと見られる。

(02月04日 10:15)